

## 第3代学長の歩みを振り返る

2025(令和7)年4月より、第36代学長に北村行伸データサイエンス学部教授が就任されることになりました。150年を超える本学において29人目の学長になります。

さて、長い歴史の中で興味深い学長に、第3代学長の本間海解(ほんまかいげ、1857-1908年、法名:日感)がいます。本間海解が学長となったのは、遷化から10年後の1918(大正7)年6月9日、大学再築落成式<sup>※1</sup>に併せて行われた故本間海解追薦式の時です。『大崎学報(母校再築落成・本紙第五十号記念号)』によると、学長への追薦理由は、「故本間上人が吾が大學に寄興せられたる法勲を永く表彰する意味に於て前學長小泉、脇田、梶田並びに風間現學長各聖の請願により管長猥下の特旨を以て第三世學長に列せらる。」とあります。4人もの学長(順に第2代小泉日慈、第4代脇田堯惇、第6代杉田日布、第7代風間隨学)から、学長へと推された本間海解の功績と人柄をもう少し紹介します。

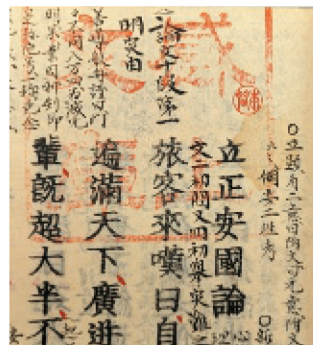
功績の一つが、本学を法制上の高等教育機関として位置付けたことです。1903(明治36)年に公布された専門学校令に基づき、新たな学校を専門学校として設立するために実行委員会が組織され、委員長には脇田堯惇が就任



第3代学長 本間海解

し、常務委員の1人として本間海解が選出されています。その後、1904(明治37)年、専門学校令に基づく日蓮宗大学林が設立された際には、初代学長として小林日董、教頭として本間海解が就任しています。

人柄については、1908(明治41)年発行の『日宗新報(1207号)』にある本間海解追悼記事に見ることができます。ある者は、教頭としての様子を「…教頭の重任を負ひ爾来孳々黽勉教授の傍ら校務を處理し其諸員を率ひ諸生を導くや…」と述べ、熱心に教えを授けながらも学校運営を行っていたことを伝えています。またある者は、「上人と爲り温雅にして沈毅學問淵博内外諸乗を綜該し尤も宗學に達し…」と述べ、温厚で何事にも動じず、博識で、宗学についてはとりわけ造詣が深い人物と評価しています。



立正大学図書館所蔵「立正安國論」  
(『録内御書』の内)A01/108/38-1

現在、本間海解の旧蔵書が、本学の古書資料館に配架されており、手に取って触れることができます。1909(明治42)年に、221部、1059冊を寄贈されたことが記録に残っています。残念ながら火災等によって一部は失われておりますが、残存している資料には、本間海解旧蔵を示す「感上文庫」や「本間」の印記を見ることができます。

※1 1916年3月8日に発生した火災により木造物が全焼したため